

東日本大震災支援情報

「被災された会員のための支援募金」の報告

3月11日から約4カ月が経ち、多くの会員の皆さんが支援物資を届けたり避難所でボランティア活動をしたり被災支援を続けています。

協会も4月29日～5月5日富士フィルムフォトサロンで「チャリティー写真展」を開き、売上金4,220,043円を朝日新聞厚生文化事業団に寄付しました。また、被災された会員を支援するために、会員諸氏による募金活動も行いました。

3月11日の地震直後から被災地方面の会員の皆さんに電話による安否確認を行い、「被災お見舞いと被害状況報告要請」のハガキを54名に送り、27名からの返信、13名の会員が半壊、軽微（自宅、事務所）との被害報告を受けました。

協会は、会員の皆さんから寄せられた支援募金と協会特別お見舞金を合せて3万円を13名の会員におおくりしました。

また、東日本大震災支援プロジェクトを作り、今後どんな支援が長期にわたってできるかを検討しています。

●桑原史成



曲ったコンクリート製の電柱 宮城県

この3月11日、ぼくは暗室で写真展用の大伸ばしのプリント作業を行っていた。突然の大揺れ、地震だ。天上が落ちるのではないかと身の危険を感じ屋外に飛び出した。

この時刻から、やがて東日本大震災にともなう未曾有の巨大な津波で多くの人々の命が奪われ行方不明者を出すことになった。

この天災とも人災ともいえる現代の地獄を記録することは同世代を生きる者の責務と感じ、地震から20日ほど遅れて現地に向かった。最初の撮影は岩手県の宮古市の被災地から南下を開始して宮城県下の各地を、さらに福島県相馬市まで足をのびた。2回目の取材は震災から2カ月後の5月中旬に、福島第1原発から30kmほど離れた南相馬

市から北上して宮古市～田老地区まで記録を続けた。瓦礫の街と化した無残な住宅地や工場跡地、それに塩水に浸された水田の耕作地など悪魔の爪痕は見るに痛々しい情景である。被災した大きい商店街には営業の写真館があった。それにアマチュアの写真家の姿もあった。仮に生命だけは助かったとしても店や自宅に保管していた原画のフィルムは流されたに違いない。それらの原画の中には貴重な写真の記録が写し込まれていたであろう。何とも残念としか言いようがない。

●水戸の震災を写す 藤井正夫

3月11日の震災、私は水戸市内のホテルにいた。激しい音と「船のような揺れ」に驚きすぐに避難した。翌日から被害場所を自転車で移動、道路は崩れてうねり目的地にたどり着くのに苦労した。

水戸は偕楽園、弘道館、常磐神社、神応寺など文化財や名所も多く被害が出ているのではないかと考えた。しかし、実際の惨状は自分の目を疑うほどの凄さ。どこも戦争直後の風景のようにしか見えない。常磐神社では県指定文化財の石燈籠が約80基も倒壊していた。水戸藩の藩校として知られる水戸弘道館ではチャイムの役割をしていた「学生警鐘」の櫓が倒壊。特に凄まじかったのは水戸東照宮。建物を巡る斜面が壊れ落ち、観光名所東照宮の惨状に言葉を失ってしまった。



3月12日、水戸東照宮も破壊され自動車がつぶされた。

●小城崇史

6月14日、JPS事務局から配信された「岩手県大船渡市の写真スタジオにプリンタを支援しよう」というメールを見て、会員の岩木登氏が主宰する被災地支援活動TSTST(東北支援東京写真家チー



ム)の第5次現地輸送(当初6月18日実施予定)でお手伝いが出来るのではと思います、情報提供者の熊井牧勇

さんと連絡を取ったのが全ての始まりであった。話を聞いた結果、備品ではなくピクトロスタットプリンタ現物を運ぶ手段が無くて困っている事がわかり、提供者からの回収、現地への輸送および設置作業に携わる事になった。その結果当初の予定を一日早め、16日に都内で現物回収、17日に大船渡市の支援先にプリンタを届け、18日に宮古市避難所及び岩手県立大学学生支援室への支援物資輸送を行い、18日夜帰京した。

6月19日で高速1,000円特例措置が廃止になり、今後の復興支援活動への影響が懸念されるが、幸いTSTSTの活動は以前より災害派遣等支援車両の扱いで首都高・東北道の無料通行措置を受けており、今後もそれが変わらないとの事。今後も写真家に限らず、現地の皆様の復興を少しでも手伝う事が出来ればと思う。

●鈴木康一



3月11日の震災から既に4カ月、早いものである。震災後1カ月ごと被災地を訪れていたが、6月30日水戸から日帰りで、宮城県岩沼市から北へ海岸沿いに現状を見に行ってみた。本来津波に合わなければこの時期は、緑一色の実り豊かな農村地域のはずである。しかし、田んぼや畑には津波に流され取り残された瓦礫や、細々と生えている雑草だけ。作物が何一つ作られていないのは、津波による塩害がもたらしたものである。ビニールハウス、農機具、納屋や農家の一階の部分が破壊されたままで、動物の気配すら感じられない。更にビニールの一部やタン屋根が時折吹く風に奇妙な音を出している様子はまるで西部劇映画のゴ

ースタウンの一場面かのような。その中に「自衛隊のみなさんありがとう」という文字が、崩れかけた家の壁に書かれていた。被災して大変だったと思うが、被災者の「心」を感じる一場面に出会えた。

この現状は、いつまで続くのか!と思うのである。

●前を向いて歩こう 庄司博彦



私が指導役を務める非営利活動ワールドチルドレンプロジェクトは、これまでに世界13カ国

の被災地や紛争地の学校で平和をテーマに写真を撮らせることで心の傷を癒す試みに取り組んできた。メンバーで仙台市内の介護職員、高橋寛さんから依頼を受け宮城県の学校で写真教室を開いた。

参加したのは、石巻市立万石浦中学校の2年生、約100名と市立渡波中学校1年生の約40名。万石浦中は、校舎の入口やまわりの道路が地盤沈下により冠水し、体育館と武道場がいまだ避難所になっている。

渡波中は、海から200mしか離れておらず津波が3階建校舎のうち2階まで押し寄せ机や備品はすべて流された。3月11日は午前中に卒業式があり、地震発生時には校内に10人ほどしか残っていなかった。帰宅していた生徒のうち6人が亡くなり行方不明となっている。

子ども達が覗いたファインダーには、悲惨な生活を強いられているにもかかわらず押されたシャッターから生まれた写真にはみんなの笑顔で満ち溢れていた。今まで当たり前だと思っていた日常生活を見直すことの大切さを写真で表現することによって何かを気付いてくれた。

撮影後、口々に「心の整理ができた」「気持ちがいすっきりした」と語ってくれた子ども達の表情が印象的だった。写真を通して人が人に語りついていくことが、心の復興につながっていく。今日も、がれきが残る町の中を子ども達の元気な声が行き交う。

(子ども達の写真は「PHOTO IS」10,000人の写真展2011」で全国展示される。)

「東日本大震災支援情報」の掲載記事を募集しています。写真を添えて、総務までお寄せ下さい。